

「おさしづ」における「道」の用例まとめ①

この連載では、「おさしづ」に道を求めたいという思いで、『おさしづ改修版』を1巻ずつ取り上げ、「道」の用例を整理してきた。この探求の出発点には、「天理教」という言葉と、「道／お道」という言葉の意味合いの違いがある。『天理教事典 第三版』では、両者を次のように説明している。

「天理教」

中山みき(1798～1887)を教祖(おやさ)と仰ぎ、教祖の姿に接し、その声に導かれ、その教えを奉ずる者によって組織された信仰集団を指す。すなわち、教祖によって啓示された教え、教え示された祭儀、および、それを信じ行う者によって形成された信仰組織や制度の総体を言う。

「お道」

道という言葉は、「おふでさき」「おさしづ」にきわめて数多く見出される表現である。それは、教えを聞き実践していく生き方を道を通ることにたとえた言い方である。

前者が、天理教という特定領域の範囲を確定しようとする、やや静的な説明であるのに対して、後者は「教えを聞き実践していく生き方」という動的な事柄に焦点をあてて説明されている。「天理教」と「道／お道」という言葉は、しばしば同じような意味の言葉として使われるが、このように見れば、「道」は単純に「天理教」の言い換えとしては理解しにくい。

原典のなかには、「道」という言葉が多用されているが、「道」という言葉を用いて説かれた独特の意味合いを探求したいということが、これまでの用語整理の狙いであった。

制限話に多い「道」

「おさしづ」における用例を整理するにあたり、「おさしづ」を割書によって、制限、本席、真柱、本部事情、教会事情、個人という6つのカテゴリーに分類してきた。それは、「道」という言葉が、どのような場面でよく用いられるのかを理解するためである。

『おさしづ改修版』の第1巻から第6巻までを通して、最も「道」という言葉が用いられる割合が高かったのは、一貫して制限の「おさしづ」である。また、本席の身上願は、ほぼ制限と同様の意義をもつとされるが、「道」の用例も、制限と同様に頻繁に用いられている。

制限とは、「親神の特別な思い、実に人間をたすけたいとの上から止むにやまれない親神の思いがいつぱいになって、あたかも、それが堰切って溢れるごとく、積極的に神意のあるところを話されたもの」であり、「おさしづ」では特にその重要性が強調されている(『天理教事典 第三版』「制限話」)。したがって、制限話において「道」という言葉が頻繁に用いられるということは、それだけ、親神の思召を理解するために、「道」の理解もまた重要であるということが言える。

「道」の展開

その制限話における「道」の用例を年代順に整理すると、「道」を用いた「おさしづ」の説き方に、展開があることが分かる。

第1巻(明治20～23年)では、明治21年の教会本部が東京府において設置認可のあった頃から、「神の道」「神一条の道」と「世界の道」「世上の道」という言葉の対比による論しが多くみられるようになる。そして、「世界の道」に比べて「神の道」は一見

したところ通りによく、細道を行くようなものに見えるかもしれないが、それこそが先の楽しみな親神の望まれる「道」であることが繰り返し説かれ、それは端的には、教祖の「ひながた」をたどる「道」であると論されている。第2巻(明治24～25年)においても、同じような対比が頻繁にみられ、「神の道」を通ることが強調されている。

このように、「おさしづ」の初期の時代には、親神の説いている「道」が、どういうものであって、どういうものでないか、という二つに分けられている。その二つの道を対比させながら、特に天理教会が発展しつつある当時の状況にあって、親神が説き、付けようとされる道、すなわち、「神の道」を通るのは、どのようにすることであるのかを、人々に理解させようとしている。そして、その「神の道」とは、いつも根本的には教祖が教えられ、人々を導いてきた「道」に基づいている。

こうした二つの道を対比する説き方は、第3巻(明治26～28年)以降には、ほとんどみられなくなる。第1、2巻の用例を前提として、「神の道」の通り方については、もうすでに何度も説いてあるものとして、単に「この道」とか「道」という言葉で説かれるようになる。こうして、「この道は…」あるいは「道」という思案などのように、特段の説明がなくとも、「道」には固有の意味、つまり、教祖によって教えられ付けられてきた道といった意味が込められたものとして使われ、何度もくりかえし、これまでの道に照らして思案をするように、と説かれるようになっていく。

「天理教」と「道」

こうした傾向と展開を踏まえ、最初にあげた「天理教」と「道」の相違に関連するような「おさしづ」を挙げておきたい。明治22年の制限話において、次のように言われている。

天理教会やと言うてこちらにも始め出した。応法世界の道、これは一寸の始め出し。神一条の道は、これから始め掛け。(さ22・4・18 制限御話)

ここでは「天理教会」は「応法世界の道」であり、それと「神一条の道」とが対比されている。また、次のような「おさしづ」もある。

天理王命と称するは、一つの宗旨である。天理王命と元一つ称するは、天の月日である。元一つ始めるは女一人である。元よく聞いてくれ。長々元一つ分らなんだ。未だへほんの一寸の初まりである。危なき道やへ思えども、何にも危なき道やない。何ぼ往還道でありても、心に誠無うては通れようまい。心に誠一つさいあれば、何にも危なきはない。楽しみ一つの道やある、と、論してくれるよう。(さ21・7・31 中台勘蔵願)

「天理王命と称するは、一つの宗旨」とある。「宗旨」とは、明治の前半ではreligion(宗教)の訳語としても用いられた語で、宗派などの所属をあらわし、「自分の宗旨は〇〇教」というように用いられた。しかし、天理王命と称する元は、「女一人」がはじめた、天の月日を仰ぎ、心に誠一つをもって生きる道である、と説かれている。こうした、天理教会と道が対比されるこうしたところに、「道」の独特の意味合いを理解する手がかりがある。